尻餅

笑福亭松鶴

淺賀大鱗書

エーお古いお噺を一席申し上げます、一年中で何と云ふても一番嫌やな月はと申しますと十二月と云ふガキで。そない憎たらし相に云わいでも宜えのでやすが、貴方様方は別に御屈托はござりませんが此方様方は皆嫌やがつてゝ御座ります。と云ふのは奥の方に大晦日峠と云ふ豪い峠がムりまして、此奴が中々越え悪い。私の親爺は此峠の中途でブランコしてあの世の方へ越えて仕舞ひました。謂はゞ私の爲には親の仇に當りますので、何でも仇を討たろと思ひますねが、毎年出逢ふて居乍ら、返り討にばつかり逢ふてますので薩張りヤクタイでムります。十二月と聽た丈けでも何と無ふ人の氣が慌しなふなりますもんで。少し風が強いと電信の針金が笛の聲色遣ひよつて、ヒュ――ウ……。と鳴り出します。障子の破れやなんぞ江戸辯遣ひよる。ベラヽヽヽヽ。ベラヽヽヽヽ。何だベラヽヽヽヽそんな事は云やしまへんげど。……橋の上を通てる人やみな、口の中へ熱々の燒豆腐でも入れた様にアソフソフソフソフ、アーツソフソフソフ。爪先で飛で歩いてはります。二十四五日頃にも成ると賃

搗屋の爺さんが、大きな釜を差し擔ひにして。地獄の宿替みたいな恰好でナ。イヨウ……ショウ……イヨウ……ショウ……と歩き始めます。すると其あとから、餅箱宜ろしいかア、餅ばこ――。おーメめ繩え、飾り繩え、松ヨウ山草アエ……。もふ此のメ繩賣りの聲が聽えるちウと、向ふからお正月が山高帽着て、ど――ツと押し寄せて來る様な氣がして、何と無ふ氣がイソ〳〵いたします。

「何や」

「何やゝ無いで、能ふそないに落着つてるでナ。鑄掛屋の親爺が軍艦引受けた様な顏して、火鉢の前へジツクリ坐り込んでからに。一遍煙管放してやつたら何うや。貧乏町の戸長はん見たいに持ち切りやがナ。煙管の雁首が火に成らへんか、黒い顏から煙ばつかり出して、全で煙突やがナあた情け無い」

「そふ汝の様に云ふたら、俺に三文の値打も無いなア」

「また一文の値打も有るかいナ。今日は幾日やと思ふてるのや。極月の三十日やで知てるか。」

「左様ぢや。昨日が二十九日で明日が三十一日や」

「向ふにお正月が來るのやで」

「そら勝手に來るのや。俺いが招待したんや無いがナ」

「能ふあんな氣樂な事が云へるでナ。斯ふして夜業してるのは是れ何やと思ひなはる。子供の物を縫